

平安前期物語と和歌史

—— 現実世界と物語世界を越境する和歌 ——

目次

凡例……………viii

序章……………1

一 本書の目的……………3

二 物語の和歌に関する先行研究の傾向……………7

三 一〇世紀の和歌の主な動きと先行研究……………9

四 本書の構成……………14

第一章 新しい和歌表現の開拓と物語の和歌……………19

第一節 『うつほ物語』の和歌と初期定数歌——開拓された和歌表現の展開……………21

一 はじめに……………21

二 『うつほ物語』の和歌と初期定数歌および河原院周辺歌人詠の関連……………22

三 風を「ぬるし」と詠む表現……………24

四 「すずむ」の語……………26

五 〈角が落ちる鹿の性質〉を詠む表現……………34

六 〈蟬の鳴き方〉を詠む表現……………36

七 終わりに……………39

第二節 『うつほ物語』の和歌と安法法師の歌——出家者に関する和歌表現……………45

一	はじめに……………	45
二	遁世の決意を示す「今はとて」……………	46
三	出家者の環境を表す〈「松風」の寒さ〉……………	54
四	「百敷」と山の対比……………	59
五	終わりに……………	60
補説	出家や極楽往生に関する「すずし」……………	67
一	はじめに……………	67
二	一一世紀までの「すずし」の用例と先行研究……………	70
三	『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」……………	72
四	『紫式部日記』消息文に見られる紫式部の思想と「すずし」の関連……………	78
五	終わりに……………	80
第二章	物語の登場人物と贈答歌……………	83
第一節	『竹取物語』貴公子の求婚譚における贈答歌……………	85
	—— かくや姫の歌の特異性と人物造型 ——……………	85
一	はじめに……………	85
二	地の文に表れるかくや姫の人物像……………	86
三	贈答歌におけるかくや姫の特異性——返歌の場合——……………	88

四	贈答歌におけるかぐや姫の特異性——贈歌の場合——	95
五	かぐや姫の歌の先行研究との比較	100
六	終わりに	102
第二節	『竹取物語』「今はとて」の歌の特異性	105
一	はじめに	105
二	「今はとて」の歌の先行研究	106
三	「思ひ出づ」という語の先行研究	108
四	贈答歌における「思ひ出づ」	110
五	かぐや姫の「今はとて」の歌の特異性	115
六	終わりに	117
第三節	『落窪物語』の贈答歌と心情説明	121
一	はじめに	121
二	贈答歌における詠み手の心情の説明——女君と道頼——	123
三	贈答歌における詠み手の心情の説明——あこきから典葉助へ——	137
四	終わりに	140
第三章	物語の構造と和歌	145
第一節	『うつほ物語』「国譲・下」巻の水尾訪問段の唱和歌群について	147

一	はじめに	147
二	『うつほ物語』の唱和歌群の機能に関する先行研究	148
三	歌群Aについて	150
四	歌群Bについて	159
五	終わりに	163
第二節	『うつほ物語』「楼の上・下」巻の俊蔭女の歌	169
	——長編物語の終結における和歌の機能——	
一	はじめに	169
二	うつほへの移住を呼び起こす歌	171
三	俊蔭を想起させる歌	172
四	京極邸を意味付ける歌	176
五	過去と現在を対照させる歌	178
六	俊蔭女の憂いと秘琴演奏を結び付ける歌	180
七	現在の京極邸を詠む歌	185
八	京極邸および俊蔭への叙爵と先行の歌の関わり	187
九	終わりに	189
	終章	193

一	本書のまとめ	195
二	一〇世紀の物語を組み込んだ和歌史の研究の展望と今後の課題	199
	初出一覧	201
	主要参考文献	203
	あとがき	217
	索引	000

凡例

一、散文作品の引用は、『竹取物語』『落窪物語』『源氏物語』『紫式部日記』は『新日本古典文学大系』、『うつほ物語』は『うつほ物語 全 改訂版』、『伊勢物語』『大和物語』『蜻蛉日記』は『新編日本古典文学全集』によった。仮名遣いや表記は基本的にテキストのままとしたが、改めたところもある。不明な語については(ママ)と傍記した。引用後の()内に、巻名や頁数を示した。巻名の表記は、それぞれのよったテキストに基づく。『源氏物語』については、テキストの巻数を○内に示した。

一、韻文作品の引用は『新編国歌大観』により、適宜ひらがなを漢字に改めた。引用の後の()内に、巻名や歌番号などを示した。「」内は、題や複数首前に書かれている詞書である。『万葉集』の和歌は、新訓に漢字をあてて示した。

一、注に和歌を引用する際は、詞書・作者名・和歌本文の間に／を挿入して示した。

一、各引用は次の方法で行った。

1、稿者による注を()内に示した。

2、適宜傍線を施した。

3、ルビは必要だと思われるものを残した。

4、旧字体の漢字は適宜新字体に改めた。

5、反復記号「ヽ」「ゞ」「〳」はそのままとした。変換できないものは他の反復記号に改めた。

一、各テキストについて、次のように略称を用いた。

・『新日本古典文学大系』…『新大系』

・『新編日本古典文学全集』…『新全集』

・『日本古典文学大系』…『旧大系』

・『校注古典叢書』…『校注叢書』

・『新潮日本古典集成』…『新潮集成』

・『角川ソフィア文庫』…『ソフィア文庫』

・『うつほ物語 全 改訂版』…『おうふう』

一、稿者による現代語訳は《 》内に示した。

序 章

一 本書の目的

本書は、日本の一〇世紀に作られた物語における和歌を、和歌史の中に位置付け、和歌史の要素として示すことを目的とする。

日本の一〇世紀には、和歌に様々な動きが生じた。それは、幅広い身分層にわたって日常的に和歌が詠まれるようになったこと、それに伴って贈答歌が盛んに詠み交わされるようになったこと、定数歌が作られるようになったこと、歌合や歌会といった、和歌を詠むことを目的とした催しが度々開かれるようになったこと、私家集が数多く編纂されたこと、などである。和歌の性質や表現、用いられ方を通史的に捉える和歌史において、一〇世紀は注目すべき時代なのである。そして、同時代には、物語が多く作られるようになった。現在はその一部が残っているのみだが、それらを見ると、いずれの作品も必ず和歌を有している。つまり、物語の中の和歌も当時の和歌の一部なのであり、和歌は、現実世界と物語世界の二つの世界の壁を越えて用いられているのである。和歌史を捉えるには、和歌が二つの世界を越境していることを念頭に置く必要があると言える。

しかし、従来の和歌研究において、そのような観点で物語の和歌が捉えられたことはほとんどない。一〇世紀の和歌史は、当時の歌人やその歌風、当時編纂された勅撰集の特徴など、右に挙げたような現実世界に生じた和歌の動きを軸として捉えられてきた。一〇世紀の物語の和歌は、和歌史から外されてきたといっても過言ではない。物語の和歌を和歌史と結び付ける考察、すなわち、物語の中の和歌を現実世界における和歌と照らし合わせて捉える観点に明確に基づいた考察は、物語の成立順に沿って言うると、『源氏物語』が初めてである。それ以前

に成立した物語の和歌についても、同時代の和歌の一部として捉える考察はわずかながら行われている。しかし、それらは、表現が物語の和歌と現実世界の和歌に共通しているということの指摘に留まりがちであり、表現が共通しているということに和歌史としての意味を見出そうとする観点は、なかなか見られない。よって、一〇世紀に成立した物語の和歌研究においては、和歌史的観点が確立していないと言える。

かつて、小町谷照彦氏が「物語日記文学の形成にかかわる和歌の役割は何か」という題目の論考を発表した。従来、物語内の和歌については、おおよその題目のような観点で論じられてきた。つまり、和歌は、物語の登場人物の描き方や主題、展開といった、それぞれの物語特有の物語世界の構築にどのように貢献しているのかという観点である。小町谷氏は、右の論考において複数の物語や日記に着目して、「漫然と和歌が配列されているように見える箇所でも、それぞれの作品や作者が必ず何らかの方法意識によつて構成されているのが常」だと述べている。これは首肯できることである。一方で、物語内の和歌に関する従来の研究は、小町谷氏が指摘するところの「それぞれの作品や作者」の「方法意識」を照らし出すことに偏りがちであると言える。それらは、基本的に個別の物語を対象として論じられており、その物語の枠を越えて考えられることはない。

先述のように、物語の和歌を和歌史の一部として捉えようとする姿勢は、『源氏物語』の和歌に関してはしばしば示されている。たとえば、早くに後藤祥子氏は、『源氏物語』中の和歌に見られる「新出歌語」が「前代の広範な」和歌の中から生まれているであろうこと、物語内の和歌的特徴的な表現には、後代の和歌に見られる「流行」の「先がけ」となるものがあることなどを指摘した。以降、複数の研究者が、『源氏物語』の和歌と和歌史の接続を考えている。³⁾それらにおいては、『源氏物語』の和歌の歌語や表現の特徴に目を向けるものが多く、この物語特有の歌語や表現が複数あることが明らかになっている。また、そのような表現について、和歌が地の